

第30回むし歯予防全国大会～30回目の記念大会の開催

大会テーマ：日本のフロリデーションをすすめるために



はじめに

10月28日（土）にNPO法人日本むし歯予防フッ素推進会議（略称 NPO 日 F 会議）は、東京水道橋の血脇記念ホールで第30回むし歯予防全国大会を開催しました。大会の内容の報告と、わが国における公衆衛生的フッ化物利用のさらなる拡大について述べたいと思います。

本大会では、20世紀以降に多くの人々の歯の健康づくりに寄与した、フッ化物の利用の原点である地域水道水フロリデーション（以下、フロリデーション）を正しく理解するとともに、21世紀において、国民の生涯にわたる歯の健康づくりに欠くことのできない公衆衛生的なフッ化物利用であるフロリデーションをすすめるためにシ

ンポジウムを行い、わが国のフロリデーションの実現を阻む問題点の抽出を行いました。

冒頭の記念式典で、境 脩大会会長（NPO 日 F 会議会長）は30回目のむし歯予防全国大会にあたり、過去29回の大会の積み重ねの中で、全国津々浦々で公衆衛生手法による口腔保健対策の導入に奔走された本会会員はじめ多くの関係者にとっては苦難の道と大きな試練が続いてきたとはいえ、近年における集団フッ化物洗口の拡大実績を賞賛しました。さらに、地道に継続するフロリデーションへの取り組みは、地域の人々の理解と支援を基に、近い将来、その実施が現実のものになろうとする時期に至っていると挨拶しました。次いで、日本歯科医師会大久保満男会長と日本口腔衛生学会中垣晴男理事長から御祝辞をいただきました。日本歯科医師会からは8020運動達成のために科学的根拠に基づいたフッ化物利用の必要性について、また、学会からはフッ化物利用で国民の健康づくりを学術的に支援するという心強い言葉が盛り込まれていました。

基調講演：「地域水道水フロリデーション：実証済の安全かつ効果的な公衆衛生手段」

節目となる30回目のむし歯予防全国大会の基調講演には、口腔生物学の大家であり、米国のみならず世界界のフロリデーションの第一人者であるカリフォルニアサンフランシスコ大学のアーネストニューブラン名誉教授を講師に招きました。フロリデーションについて、以下の項目に関して、86枚のスライドを用いて講演しました。

1. フロリデーションの歴史
2. 公衆衛生手段としてのフロリデーション
3. フロリデーションの必要性
4. なぜフロリデーションに反対するのか？

フッ化物はいわゆる斑状歯の原因調査に端を発して、地域飲料水中のフッ化物濃度とう蝕有病率に負の相関があることが疫学的に実証されました。疫学的研究の先駆者であるマッケイとディーンたちの努力に依るものです（図先駆者）。この過程で重要となるフッ素性エナメル白斑から審美的に問題となる歯のフッ素症まで写真を用いて解説された後に、ディーンによる米国21都市ににおけるう蝕とフッ化物濃度との関係、さらにフッ素性エナメル斑との関連性が明らかにされ（グラフ図）、20世紀の公衆衛生施策フロリデーションは1945年1月25日から米国ミシガン州グランドラピッズで飲料水中フッ化物濃度を1ppmに調整して開始されたフロリデーションの歴史過程に触れられました。



う蝕と関連する斑状歯の疫学的研究の先駆者たち



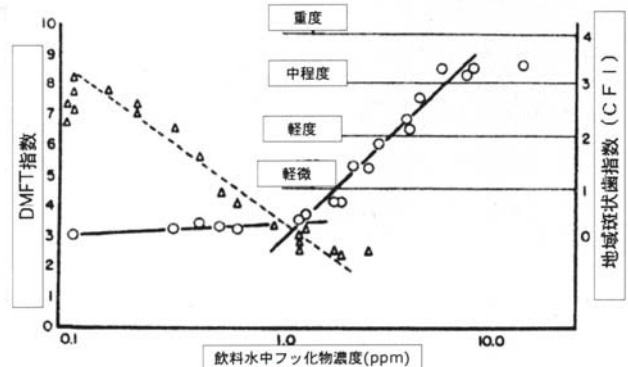
ディーン(H.T. Dean)
1893-1962



F. McKay
1874-1959

- H. トレンディーディーンは米国国立歯学研究所の初代長官であり、う蝕予防のためのフッ化物研究の先駆者の一人となった。
- フレデリック マッケイがいち早く斑状歯を観察し、その原因を明らかにしようという決断力によって、水道水フッロリデーションの利益の発見につながった。

フッ化物濃度と、う蝕数(DMFT指数)、斑状歯(フッ素性エナメル斑)との関連性



フッロリデーションの効能と安全性

フッロリデーションの効能として、う蝕予防効果は小児で40%内外、成人で20%と述べられましたが、近年に初期のう蝕予防効果（50-60%）が示されなくなってきた理由について、家庭や施設でフッ化物局所応用が広く普及してきたこと（希釈効果）と至適濃度に調整された地区の水を使って加工された飲食物に含まれるフッ化物を摂取することによる拡散効果（いわゆるハロー効果）をあげて説明されました。フッロリデーションの効果は小児と成人の歯冠部う蝕予防ならびに高齢者の歯根面う蝕予防となる研究についてもこれまでの研究成績を基に述べられた。また、フッロリデーションの安全性では、60年以上の使用実績と、信頼できる査読制度により支持された何千もの研究論文から、至適濃度に調整されたフッロリデーションは、健康に悪影響を及ぼすことはない結論づけました。しかも、科学的な分析から、世界の保健専門機関と団体はフッロリデーションの安全性を認めており、さらに、フッロリデーションを費用効果に優れている公衆衛生手段として認知されており、今後も米国はじめ世界各国でフッロリデーションの継続と導入が必要であると述べられました。

フッロリデーション；社会的平等と優れた公共政策

フッロリデーションは、健康のために、既に飲料水に含まれている微量のフッ化物を適正な濃度に調整する方法であり、とりわけ年齢、性、人種に関係なく、意識的に何ら努力しなくても、あらゆる人々の利益となる理想的な公衆衛生手段の一例であり、優れた公共政策であるとまとめられました。

しかしながら、**なぜフッロリデーションに反対するのか？**の項については、歴史的に見ても、この優れた公共政策には、1945年グランドラピッズで実施されたフッロリデーション導入当時からあった逸話を引用してフッロリデーション反対について解説を加えられました。「**フッ化物が添加された水を飲んだら、体重が急に増えたわ!!**」「**風呂に入ったら、体中がかゆくなったぞ!!**」諸事情からフッロリデーションの開始が約3週間遅れたわけですが、その間に前述の苦情が出されたそうです。さらに、フッロリデーション反対運動の年譜、フッロリデーション反対者のタイプから反対派のデモの写真も供覧しました。**＜何がフッロリデーション反対者を 駆り立てるのか？＞**のスライドでは、フッ化物嫌い：フッ素を健康上有害なものと認識していること、罪と罰：食習慣が悪いのだから、むし歯となって当然との見方、健康管理に行政が介入することへ反対する、妄想パラノイア：行政/産業/保健専門家の共謀という思い込み、とっさの思いつきで、なんでもいから有名になりたいという思い、これらが絡み合っってフッロリデーションに反対するという分析を行われました。

ニューブラン先生の本記念講演のまとめ；

- ・飲料水中のフッ化物濃度とう蝕有病率に負の相関があることは、その前に発見されたフッ素性エナメル斑（斑状歯）がきっかけとなって見出された。
- ・世界中の保健専門機関は、地域のう蝕予防のために、フッロリデーションが最も費用対効果が高く、平等で安全な手段であることを引き続き認めている。
- ・とりわけ、低所得、低い教育水準と歯科医療へのアクセスが良くない人たちでは、う蝕が未処置のままであり、いまでも水道水フッロリデーションは必要である。
- ・少数だが声高な反対者は様々な理屈を主張している。しかし、それらに科学的根拠はなく、フッロリデーションは公衆衛生手段として実証済である。

シンポジウム；わが国におけるフロリデーション実現への課題

日 F 会議 30 年とむし歯予防全国大会の足跡をスライドで回顧した後に、小林清吾先生（日本大学松戸歯学部教授）と佐久間汐子先生（新潟大学医歯学総合病院講師）をコーディネーターに、4 名のシンポジストが各々の立場から発言しました。池主憲夫先生（日本歯科医師会常務理事）は「フッ化物利用の本来の目的である、フロリデーションやフッ化物洗口の集団的（公衆衛生的）活用に歯科医師会が組織的な対応としてどこまで取り組めるかが、8020 運動推進の前提条件として今後の主要な課題である」と述べられました。開業医の立場から、葭内顕史先生（旭川歯科医師会）は、国民の健康を守る任務を負う歯科開業医は、出来高払い制度の弊害の中に居るものの、科学的根拠に基づいた保健施策を提示する役割を担っていること。ポピュレーションストラテジーであるフロリデーションによるう蝕予防は、様々な領域に認められるう蝕格差の是正をもたらして、国民にとって健康の獲得、開業医にとっては「誇り」と「需要の創造」になること。そのため、国は専門家による検討会を立ち上げてフロリデーションガイドラインを作ることが肝要であると発表されました。中村宗達先生（静岡県東部健康福祉センター）は、行政に勤務する歯科専門職に対する質問紙調査のうち、9 割が公衆衛生は行政の仕事だと思っているものの、フロリデーションは行政の仕事であると思っている人は 4 割であり、行政に携わる歯科専門職のフロリデーションについて消極的な側面に言及されました。最後に、筒井昭仁先生（福岡歯科大学助教授）はわが国のフロリデーションについての至適フッ化物濃度、栄養素としてのフッ化物などの基礎研究の遅れを指摘しました。また、社会学的にフロリデーションのリスク認知面で、「住民は最終的には関わりたくない、専門家に委ねたい、しかし、関連情報は入手したい。」というのが一般的なスタンスであり、一般住民へのアプローチは欠かせないと指摘されました。

シンポジウムを振り返ると、第一に、歯科医師会、行政の歯科専門職、歯学教育関係者は、公衆衛生（フロリデーションなど）が人々の基本的な権利である健康の獲得に不可欠であることを認識し、業務や活動に反映させるべきこと。第二に、住民にもフロリデーション装置などのハードの面での情報提供を行い、フロリデーションの PR を積極的に行って「目に見えない」部分を明らかにする努力を行うことが挙げられた。このように課題は山積しているとはいえ、フロリデーションをすすめる関係者の熱意があれば、それらのハードルを超えることは可能である。

おわりに；「すべての人々に健康を；ヘルスフォーオール」

20 世紀以降の世界の歯科保健界における劇的な変化、それは歯科臨床を換え、多くの歯を救ったフッ化物のう蝕抑制効果の発見でした。これは基調講演のニューブラン先生のテーマ；**実証済の安全かつ効果的な公衆衛生手段である**フロリデーションを原点とします。この過程とフロリデーションの導入にあたり、スライド＜**歯科医師はなぜ水道水フロリデーションを支持するのか？「・フロリデーションは開業歯科医の経済的な利益とは相反するように思われるが、患者さんの健康の享受が（歯科医師）個人の経済的な利得より優先すること。・歯科専門家による水道水フロリデーションの支持は歯科界が誇ることのできる利他的行動の一つの好例である」**と述べています。これは歯科専門職である歯科衛生士、歯科技工士にも当てはまることであると思います。

健康はすべての人々の願いであり、随所で「ヘルスフォーオール；すべての人々に健康を」は世界の保健界で共通のフレーズとなっています。今後も、世界の口腔保健分野の人々と連帯して、わが国における公衆衛生的フッ化物利用；集団フッ化物洗口の拡大と水道水フロリデーションの実現に向けて行動して行くことを確認し、次回の第 31 回むし歯予防を沖縄県で開催することがアナウンスされました。

末尾になりましたが、本大会を後援していただいた日本歯科医師会、8020 推進財団、日本学校歯科医会、日本歯科衛生士会、日本口腔衛生学会と、協賛していただいた日本歯磨工業会ならびに広告と展示をしていただいた企業各位に心より御礼申し上げます。

（第 30 回むし歯予防全国大会実行委員 文責；田浦勝彦）